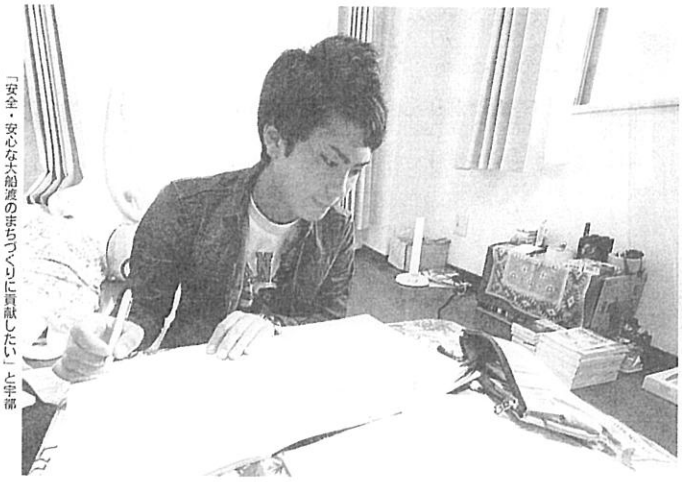
学ぶ喜び心の糧に

新天地で輝く震災遺児

多くの親子の絆を引き裂いた東日本大震災。本県の震災遺児・孤児は約580人に上っている。今春から大学や専門学校進学のため古里を離れ、慣れない一人暮らしを始めた人も多い。全国の支援者や奨学金のサポートで進学の夢をかなえられたことに感謝しつつ、「将来は古里復興の力になりたい」と目的意識を持って学業に励む。震災当初のつらい別れを乗り越え、新天地で新たな一歩を踏みだした若者たち。限りない未来を信じて、懸命に今を生きる。

【本紙1面】

◎東日本大震災の遺児・孤児　厚生労働省雇用均等・児童家庭局によると、3月28日現在、両親を失い孤児となった子ども（震災発生時18歳未満）は241人で、内訳は岩手94人、宮城126人、福島21人。両親のどちらかが死亡または行方不明となり、遺児となった子ども（同）は1372人で、内訳は岩手481人、宮城749人、福島142人。本県の震災孤児は大多数が親族に引き取られ養育されている。



「安全・安心な大船渡のまちづくりに貢献したい」と宇都宮大に進学、アパートで自習する千葉真英さん＝宇都宮市

宇都宮市・宇都宮大工学部建設学科1年
千葉 真英（まさひで）さん(18)＝大船渡高卒

被災体験世界に発信

「失ったものはめちゃくちゃ大きいけど、震災は自分をひと回り大きくしてくれた」

大船渡市出身の千葉真英さん(18)は大船渡高卒業後、「災害に強い古里のまちづくりに貢献したい」と宇都宮市の宇都宮大工学部建設学科に進学した。

震災があったあの日、陸上部のランニング中に強い揺れに見舞われた。大船渡市赤崎町の自宅に電話したがつながらず、同市猪川町の大船渡高校へ。翌日、徒歩で自宅へ。真っ暗な三陸鉄道のトンネルを抜けると、変わり果てた古里があった。

父耕成さん(46)が告げた母常子さん＝当時(46)＝と祖母洋子さん＝同(72)＝の死。「頭の中が真っ白になって、こういうことを言うんだな」と初めて思った。

母は、津波にのまれた自宅の2階で亡くなっていた。傍らに、1階にあったはずの真英さんの衣類や学習道具があった。

「物を2階に上げていて、逃げ遅れたのではないか。母はいつも自分のことより人のこと、子どものことを優先した。最高にいい母だった」と振り返る。

母の死を、事実としては分かっても、受け入れることはできなかった。「自分の心がなくなった」ような感覚。もう失うものは何もない。何も怖くはない」。ひたすら、がれき撤去に明け暮れた。

数日後、友人が訪ねてきた。

「おう、無事だったか」と語り掛けた真英さんを、友人は無言で抱きしめた。

その時初めて、真英さんは泣いた。

少しずつ、前を向き始めた真英さん。耕成さんと祖父洋一さん(74)の支え、友人たちの励まし。弟の史浩君(15)＝大船渡高1年＝と宝幸君(10)＝赤崎小5年＝の笑顔も心の支えに、大学合格を果たした。

3月下旬には、一般財団法人教育支援グローバル基金（本部・東京）が企画した「ビヨンドトウモロー」米国スプリングプログラムに参加。米国の大学生らと交流し、自らの被災体験を英語でスピーチした。

「被災体験を被災者自らが発信し共有しなければならない。自然災害は防げないとしても、自分たちが体験を語ることが迅速な避難につながり、被害を最小限に抑えることができればと思う」

宇都宮市での慣れない一人暮らしだが、心にはいつも母がいる。古里が大好きである。

「被災体験の発信活動を続け、安心安全で魅力的な大船渡のまちづくり」「自分の心がなくなった」「力を尽くしたい」と誓う。

私の大切な物

高校時代に履いていた上履き

大船渡高時代の3年間、履き続けた。「これを見れば、つらいときでも頑張れる」と思う。消えかかった自分の名前は母が書いてくれた。「達筆で書道教室を開いていたこともあった母は、いつも自分の持ち物に名前を書いてくれた」。これからの道のりも、母と共に歩み続ける。